

地車製作

(関西地車製作事業協同組合理事長・大下孝治さん)

文化を守り、地域に貢献

勇壮なことで知られる岸和田だんじり祭。

そのだんじりの製造や修理を通じて、大下工務店は

町の文化を守り、地域の活性化に貢献している。

急旋回「やりまわし」

「地車」と書いて、何と読むかご存じだろうか。

おそらく大阪では正しく読める人が多いだろう。さらに岸和田市に限っては間違いなく大半の大人が読めるだろう。

正解は「だんじり(だんぢり)」である。岸和田だんじり祭で有名な、あのだんじりのことだ。

岸和田だんじり祭は元禄年間にあたる1703年、岸和田藩主・岡部長泰が京都伏見稲荷を城内に勧請し、五穀豊穡を祈願したのが始まりとされている(諸説あり)。

西日本では、祭礼に奉納される唐破風の木屋根・小屋根がついた山車のことを、昔からだんじりと呼んでいる。だから西日本では秋祭りのことをだんじり祭りと呼ぶことも多い。そうしただんじり祭りの中で、岸和田だんじり祭がひととき知られるようになったのは、1980年代の末頃か

らである。その特徴は、とにかく勇壮なこと、もっと言えば実に荒っぽいのである。

なにしろ高さは4メートル近くにも及び、重量は4トン以上にもなるだんじりを数百人がかりで曳くのだが、祭礼なのだから厳かに静かに曳くのかと思いきや、岸和田に限っては違う。角を曲がる時でさえ曳き手たちはスピードを緩めることなく走りながら直角に曲がろうとするのである。「やりまわし」と呼ばれるだんじり祭一番の見どころのこのときは、勢い余って沿道の住宅に衝突し、だんじりだけでなく家まで壊してしまうことなどしばしば。時にはだんじりと住宅に挟まれたりして、人命が失われることもあるほどだ。

その“カゲキ”さから今ではすっかり全国区の人気になり、毎年9月と10月に行われる祭りには全国から数十万人もの見物客が訪れ、関西地方ではテレビ局が生中継までするビッグイベントになっている。

黒松でつくるコマ

大下工務店はその岸和田に工場を構え、だんじりの製造や修理を主に手がけている。私たちが取材に訪れたときには、工場の中に10台くらいのだんじりが所狭しと並べられ、10人ほどの職人が黙々と作業に取り組んでいた。

「今はだんじりの修理に文化庁から助成金が出る仕組みがあります。そのため古くなって壊れたりしただんじりを長い間、我慢して使っていた町会などが修理に出せるようになり、全国から仕事の依頼が来ています」

社長の大下孝治さんが話す。

修理にも、本体締め直し、屋根板葺き直し、彫刻再生補修、鍍金直し等々、さまざまな作業がある。ときには江戸時代につくられただんじりの修理を依頼されることもある。岡山県の某町から、土台の一部が腐食しただんじりの修理を頼まれたときは「大変だった」と大下さんは言う。



おおした・たかはる（写真、前列左から2番目）
1952年、大阪府生まれ。大工として働いていたとき、知人から「だんじりの仕事をしてみないか」と言われたのがきっかけで、26歳のときからだんじり製作を中心とする。今は設計と営業が主な役割。西日本以外の需要掘り起こしに熱心で、声がかかれば「どんなに小さな仕事でも断らずに必ず出向く」と言う。



写真左上、組みコマの模型。組みコマは小さな松材を複数組み合わせでつくられる。写真左下は、コマの芯を削っているこの道15年の職人さん。年間900個のコマを削り続けていると言う。

部材を取り換えずに補修してほしいという要望だったため、腐食した部分を削って別の木を添えて補修しなければならなかったからだ。

だんじり祭最大の見せ場である「やりまわし」のときに重要な役割を果たすコマ（車輪）は、修理よりも新しくつくることが多いという。

1台のだんじりに4個取り付けられるコマは、約4トンの荷重を支えながら回転してだんじりを走らせなければならない。昔と違って今は舗装路の上を走るのだから、コマにかかるダメージは激しい。これまでそのコマには通常、松の無垢材が使われてきた。直径60センチ以上の松を切り倒し、幹の部分を厚さ30センチくらいの輪切りにして中心に軸孔を空け、コマとして使うのだ。

「コマの材料としては粘りと弾力のある松が一番いいですね。割れにくいんです。でも、米松は割れやすい。国産の黒松が一番です」

特許技術も開発

しかし、直径60センチ以上の松となると、相当な樹齢の木になる。そうそうあるものではない。それだけの松を伐採して運ぶとなると輸送費もそれなりにかかる。しかも幹が曲がっていたらコマには加工しにくい。たとえ巨木でも、1本の松からつくることができるコマの数は限られている。そこで大下さんが開発したが、組みコマだ。

「無垢コマに使う松よりもっと小さな松材を複数、組み合わせでコマの形にするのが組みコマです。ほぞと穴をしっかりとめ込んだ上にふたで押さえ、最後に金具で止めますから、組んだコマが崩れることはまず

ありません」

と大下さんが胸を張る組みコマは、同社の特許技術である。

「大木を使わないということは環境にもやさしいエココマでもあるので、一度挑戦してみることにしました」

大下さんはこともなげに言うが、開発には2年以上かかった。一つひとつの部材を組み合わせでコマをつくるには、精密な加工技術が必要となる。実際、最初のうちはどうしても隙間ができた、うまく組み合わせられなかったりしたという。

しっかり乾燥させておかないと割れやすくなる問題もあった。窯の中に入れて40℃くらいで約1カ月間乾燥させ、さらにその後長い場合は1年くらい自然乾燥させるという技法にたどり着くまでは、何度も試行錯誤を繰り返さなければならなかった。

現在、大下工務店では無垢コマと組みコマ合わせて年間900個前後の



写真中央、作業場の全景。本体を解体して、部材の歪みや反りを直し、仕口・継手を調整し、再度組み直す。写真右下は、屋根板を葺き直しているところ。

コマをつくっている。

協同組合設立で一致協力

9月と10月のだんじり祭が開かれる当日は、大下さんたちは工場で24時間以上待機し続ける。自分たちがつくったり修理したりしただんじりが壊れたらすぐに直さなければいけないからだ。

「9月の祭りに出るだんじりは全部でも30台くらいですから、各工務店が手分けして対応すれば何とかありますが、10月の各地域の祭りのときにはうちだけで80台くらいのだんじりを見なければならぬので大変です。もともとだんじり祭は早朝から始まりますので、朝の5時半ごろ工場に出て、壊れたとかコマが外れたという連絡がくるたびに工場に修理に取り掛かります。柱が折れたら柱を取り換えてでも、また曳き回せるようにしなければいけません。24時

間ぶっ通しで仕事をすることもあり、もう戦場のような騒ぎですよ」

そう言いながらも大下さんはどこか楽しげな様子だ。だんじりは施主である各町会にとって、町の宝のようなもの。いいだんじりをつくれれば町の人たちは素直に喜び、「あのときのだんじりは素晴らしかった」と語り草になることもある。そのだんじりをつくる仕事に大下さんたちもまた誇りを持っているし、この仕事が楽しく、好きでたまらないのだ。「うちで一番若い職人は23歳です。だんじりが好きだという若い人がこの世界には結構入ってきます。ただ、だんじりだけでずっと食べていけるかどうかはわからないので、うちは一般の住宅や神社仏閣の仕事もしています」

2013年には岸和田市内の工務店中心に関西地車製作事業協同組合を組織し、大下さんが理事長に就任した。だんじりは町の宝であり貴重な文化財。その仕事を工務店同士が争って取り合っているのは、地域の発展にもつながらないから、工務店同士が協力し合おうというのが目的だった。「おかげで今は1年中忙しいですよ。もう関西に閉じこもっているのはダメ、どんどん外に出て行って、各地のだんじり文化の発展に貢献すれば、仕事はまだまだ増えます」

と語る大下さんによれば、最近では九州や中国地方の町会などからもだんじりの修理を依頼されることがあるそうだ。

季節は春。9月、10月の岸和田だんじり祭に向けて、だんじりづくりも最後の追い込みに入る。祭りをする前はやる気持ちを抑えながら、大下さんたちは今日もだんじりづくりに精魂を傾ける。